2017.10

KAGAYAKU かがやく

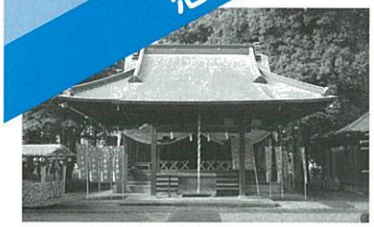
45

題字：木版 西野一男さん

生涯学習情報紙：生きがい探しのパートナー

感動人生！ ここに生きる元気な人間（びと）

▼文・イラスト/代表の野崎皓布さん　レイアウト/中村さん



▲中村さん撮影の二本木神社

▲二本木神社　のぼり旗調査

▲研究会の皆さん　前列左から２人目が中村さん

日光街道 二本木宿探訪

発行日　平成27年11月1日

第5号

発　行：二本木・狭山台区長会
日光街道二本木宿研究会
事務局：野崎　皓布
04-2934-6248

ダイジェスト版　二本木宿の屋号調査報告①　～上宿編～

二本木宿の生活が見える

屋号は通常、商家や歌舞伎などの家の称号であり、多くは意図的に付けられた。しかし、二本木宿における屋号はそれとは違うようだ。

多くは、地域社会の利便性から自然発生的に流布されたもので、日光街道が開かれ街道筋に家並みが整えられた頃からのものと思われる。ところが、八王子千人同心の往来した日光街道を想像させる屋号はわずかで、地域経済の要衝として栄えたであろう二本木宿の庶民生活と関わりの深いものばかりだった。

上宿（二本木二区）の屋号は、顕著にそのことを示しており、殆どが農家の業業として始まった稼業の業種が、自然発生的に人々に言われるようになったものである。「ちょうちんや・くすりや・しょうゆや・たねや・うどんや」など、いずれも二本木宿の人々の生活に密着した屋号だ。それらが、明治以降に姓を公に名乗れるようになっても、二区だけで 22 軒もある友野姓や 14 軒もある田辺姓の判別など、日常生活の利便性で存続してきたのであろうか。（軒数は平成 12 年度版自治会名簿より）

屋号紹介

「つけぎや」
付け木とは、竈の種火にするための薄く削がれた木片で、先に硫黄が塗られている。日常生活に欠かせない必需品を自家製作していたのであろう。

「さかぐら」
この屋号の家は、二本木村長田領の名主家であったが、江戸後期に酒造りを営むようになり、この稼業が屋号として広まったのだろう。

上宿

「さかや」
屋号「さかぐら」の隣家で同姓であるが家伝では別系であるという。瑞穂町史には、後北条家にゆかりのある家だとある。酒造りをしていた伝承もある。

「らんぷや」
明治以降につけられたことは明らかだ。過去には、「おもて」といわれていたこともあった。

掲示板　次回（12/1 号）は、屋号調査報告～中宿編～を掲載します。

■中村（なかむら）　香織（かおり）さん（狭山台）
歴史大好き、地元大好き

狭山台に住む中村香織さんは、地元の歴史を学ぶ『日光街道二本木宿研究会』の最年少メンバーです。

「地元の方が当たり前に知っている地域の歴史も、転入者は知らないことが多いんですよ。」家族で引っ越して10年、地域の歴史を知りたいと平成27年6月に発足した研究会に参加。「ほとんどが60代～80代の男性ですが、40代の私を娘のように受け入れてくれて、とても話しやすいんです。」と運営事務全般を一手に引き受けて頑張っています。

「教科書の歴史と地元の歴史の繋がりを知ることが、楽しいです。」そう話す中村さん。ある日の例会に伺いました。テーマは『屋敷神（やしきがみ）』。古いお宅の庭に祀られている小さなお社（やしろ）の『屋敷神』が二本木には、まだ多く残っています。「屋敷神はお金に余裕がないと作れないからね。この辺で屋敷神が多く作られたのは、享保の改革の頃だよ。」「幕府の経済政策がうまくいき、二本木も経済的に潤っていたからね。」郷土史に詳しい会員の話に中村さんが大きく頷いています。教科書と身近な地域の歴史の繋がりに、興味が尽きない様子です。

「江戸時代、宿場として大きく発展した二本木ですが、その歴史はどんどん忘れ去られています。昔を知る人たちが居る今こそ、記録を残さなくてはと思っています。」中村さんの言葉に熱がこもります。会では毎月、会報『日光街道　二本木宿探訪』を発行し、郷土の歴史を回覧板で伝えています。会報掲載の写真のほとんどは、長年カメラを学ぶ中村さんの撮影です。聞けば、かつて編集デザインの仕事をしていた中村さん。お年寄りや忙しい主婦にも気軽に読める様に、カラー刷りで大きな文字、大きなイラストや写真を、と、紙面のレイアウトも工夫します。特に反響があったのは、古い家々の屋号とその由来をイラストと共に表した5号で「忘れ去られそうな屋号の歴史を記録に残せました。」中村さんは嬉しそうです。

会議が盛り上がってくると、紅茶とコーヒーのポットを両手にニコニコと、みんなの席を回る中村さん。会議終了後も片付けや会計事務に忙しそうですが「皆さんの娘みたいなものですから。」と笑います。郷土愛に溢れる、かがやく人でした。

■トールペイント・ソレイユ（東町公民館）
楽しんで描くトールペイント

東町公民館の部屋で、生徒さんたちが、楽しそうに紙やボードに色を塗り始めています。今日は、公民館サークル『トールペイント・ソレイユ』の教室の日です。

下絵を鉄筆でトレースして、それから色を塗る、何十種類ものアクリル絵の具を使って、濃淡を出し、細い筆や太い筆を交互に替えての作業になります。

講師の菅野佳寿江（すがのかずえ）さんは、20年ぐらい前に、友だちの所で見た飾り物に心を引かれ、この装飾技法を習い始めたという事です。『日本手芸普及協会トールペイント部門講師』の免許を取ってから、自宅のマンションで教えていましたが、生徒さんも増えてきて、手狭になった為、今の公民館に移り現在に至っています。

トールペイントとは、ヨーロッパの伝統的装飾技法を土台にして、木・ブリキ・ガラス・陶器・布などのあらゆる素材に絵を描く事を総称して言うそうです。

このどんな素材にでも描ける、アクリル絵の具とは、雨に濡れても色落ちしないのが特徴で、いつまでもきれいなので、ウェルカムボードやポストに最適との事。塗ってから修正がきく時間は、わずか2～3分だそうです。パレットは、牛乳パックを利用し、一回限りで捨てます。色が落ちないから、普通のパレットは使えません。

先生は、生徒さんたちの筆の動き、色の使い方、一人一人に気を配り教えていきます。厳しさの中にも優しさがあり、とても和やかなサークルです。

自宅に眠っている、古くなった道具などは、この方法で見事、新品によみがえるそうです。

興味を持たれた方、東町公民館まで足を運んでみては、いかがでしょうか。

▲サークルの様子

▲アクリル絵の具

▲羽子板に描いた作品

▲トールペイント専用の筆

■杉山（すぎやま） 若江（わかえ）さん（東藤沢）
幅広い好奇心

「何でそこに目をつけたの？」最初に感じた疑問です。市内にお住まいで主婦の杉山若江さんは旅行が好きで、既に30ヶ国以上の海外の文化に触れてきました。杉山さんが10年前から海外旅行に行く中で気になったことがありました。それはトイレットペーパーの幅の違いです。

杉山さんはトイレットペーパーの幅の違いに興味を持ち、自身のお土産に持ち帰ったり、友人に頼んで持ち帰ってもらったりして、90種類のトイレットペーパーを集めました。

一番幅の狭いのは米国アリゾナ州の80・5ミリ。日本は114ミリ（大人の手の幅サイズ）が主流となっています。これは明治時代に伝わった時から変わりなく、JIS（日本工業規格）にもなっています。

それぞれの国の下水処理の問題や国民性（民族性）、文化の違いなど種々ありますが、日本は安くて品質の良いロールが手に入れ易い環境にあります。イスラム圏などトイレットペーパーを使う習慣の無い国では値段が高額だそうです。

「他国がどんどん幅を狭くしているのにエコを叫ぶ日本がこのままではおかしい。」と思った杉山さん。東京オリンピックまでにロール幅を100ミリ以下にしようと入間市環境フェア等で呼びかけています。このような活動が注目を浴び、毎日新聞の取材も受けました。

「お互いの思いを共有できる仲間に感謝しています。人という財産は宝であり、恵まれた人生に感謝です。」と杉山さんは語ってくれました。

過去には『入間市生涯学習をすすめる市民の会』委員として、『いるま塾の会』では会の創設にも携わりました。現在は『いこいこクラブ』（高齢者の健康推進）、『ファンゴマッシェ』（万燈まつりの子どもの広場）の代表など幅広い市民活動を展開しています。

▲各国のトイレットペーパーの展示

▲ファンゴマッシェの活動
（子どもの広場のボランティア募集中）

■犬飼（いぬかい） まおさん（下藤沢）
輝く！若きピアニスト

入間市生まれの入間市育ち。不老川から程近い場所で育った犬飼まおさんは、3歳の時から23歳の今日まで、なんの迷いも無くピアノを愛し、そしてまたピアノに愛され続けてきました。

ピアノを始めたのは3歳。母親が指導するピアノ教室の発表会に出演したいという想いからでした。ピアノを弾いて、その演奏を誰かに聴いてほしい。おとなになった今も、その想いがまおさんを動かすのだそうです。「練習するのも悩むのも、考えるのも工夫するのも、全ては聴く人の心に届く演奏をしたいから。」アトリエアミーゴでの演奏会で語られた言葉が印象的でした。

そんなまおさんですが、実はお掃除が大好き。雑巾がけの大切さ、気持ちよさをきちんと知っています。もしかしたら、そういう生活の基本も、まおさんの演奏の根っこを作っているのかもしれません。

365日のうち、少なくとも360日は必ずピアノを弾くまおさん。弾いて弾いて本番を終えた翌日など、たまに弾かない日があるのだそうです。「こうして大好きなことに真っ直ぐ向き合える自分は、とても恵まれていると思います。家族、先生、友人、コンサートに足を運んでくださるお客様。みんなに感謝の気持ちでいっぱいです。」

武蔵野音楽大学ヴィルトゥオーソ学科を卒業。現在はドイツのロストック音楽演劇大学に進み、ドイツの音楽を、ドイツ人の先生から学んでいます。「演歌を学びたい人は、日本に来て日本人から学ぶでしょう？それと同じです。」…なるほど。

休日には、バッハやベートーベンなどドイツ人作曲家ゆかりの地を訪ねることも。ドイツに来て、日本文化の素晴らしさや日本人の謙虚さを改めて感じたり、時々入間の空気が懐かしくてたまらなかったり…。留学生活のおかげで、いろいろな事に気づくそうです。

地道な努力と感謝の心が、これからのまおさんを更に大きく魅力的な演奏家にしていくことでしょう。入間市出身のピアニストを、ずっと応援していきたいと思いました。

▲演奏中のまおさん

■入間デジタル写真クラブ（藤沢公民館）
国民総カメラマン時代なのか？

スマホは画質の良いカメラ機能が付いていますが、もっとデジカメのような機能があったら良いのになあと思う方はたくさんいます。国民総カメラマン時代と呼ばれる昨今、形態はどうであってもデジタルカメラは日常生活の中で身近なものになっています。

さて、写真撮影を通して親睦を深め合っているアカデミックな『入間デジタル写真クラブ』を紹介します。

このクラブは今年で創設14年目を迎え、5月には第21回入間デジタル写真クラブの写真展を入間市役所1階市民ギャラリーにて開催しました。主な活動内容は撮影会・写真展などで、写真の撮り方も習えます。そして学習と生きがいの幅を広げながら、ディープなつながりがあるので、いつまでも長く継続する会員が多いのも特徴です。先日、テレビ放送で古くなった思い出の写真を最新のデジタル技術を駆使することで蘇らせる番組がありました。このクラブ会員の中にも写真の修復にいずれ関心を持つ人がいるかもしれません。

例会での主な学習は、初心者からさらに撮影テクニックを磨きたい方まで、丁寧でわかりやすいカメラの基本的な使い方です。

クラブの皆さんは「様々なジャンルの写真を撮る人がいてとても勉強になる。」「大切なことは写真を通した会員同士のコミュニケーションです。」「絵になるような思い出のある作品を、これが最後と思いながら丁寧に仲間と見せ合って楽しむ、このひと時を大切にしています。」と話してくれました。

クラブ代表者は高山萬寿治（たかやま ますじ）さん。会員数は18名で三分の一は女性。月1回第4土曜日午後1時から例会があり、会費は月1000円です。㈳日本写真協会会員の木﨑芳雄（きざき よしお）先生の指導を受け、写真技術の向上を目指しています。

▲勉強会で披露した彩の森入間公園風景

■健康安全吹矢　いるまヒューストンクラブ（中央公民館）

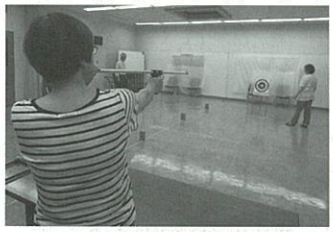
吹矢で楽しく健康に！

吹矢が手軽な健康法として、今、注目を集めています。吹矢は一種のスポーツであり、健康増進に繋がると聞き、半信半疑でクラブを訪ねました。

ホールでは、皆さんが背筋をピーンと伸ばし、矢をパイプに押し込み、狙いを定めて【フッー】と吹いています。的に刺さった矢の位置から仲間が得点を確認しています。矢が的の中心に刺さると、張り詰めた空気が、一瞬和らぎます。

▲吹矢の基本姿勢

健康安全吹矢の最大の魅力、それは、『だれでも』『どこでも』『いつでも』気軽にできるところにあります。【ヒュー】と吹いて【ストン】と的に当てることからヒューストンとも呼ばれ、クラブの名称になっています。ルールは簡単で、的を目がけて矢を吹き、点数を競い合う個人競技です。皆さんと楽しみながら、ストレス解消・健康増進・老化防止などの効果が期待できます。



▲集中して的の中心を狙います

競技の合間に、「呼吸が深くなっている」「79歳から始めている」「身近に仲間ができて楽しい」「点数を数えるので、頭の体操になる」とハツラツとした声で話しています。

クラブは、12年前に実施された市主催の講習会から有志によって結成され、現在8名で活動しています。週一回木曜日の練習のほかに、市のスポーツフェア・クラブ内の競技会・親睦会など、和気あいあいとした集いを楽しんでいます。

取材後に皆さんに勧められて体験しました。狙いを定めて、一気に息を吹くと的の端にストーン。緩やかな運動の継続に汗がじんわり。『ドキドキ』『ワクワク』感と共に、スポーツ後の爽快感を味わうことができ、また挑戦してみたくなりました。気軽なスポーツを始めたい方にお勧めです。是非、体験されてみては、いかがでしょうか。

▲いるまヒューストンクラブの皆さん

いるまなびと大作戦　パスワード：挑戦

第23回いるま生涯学習フェスティバル

今年も新たな「学び」と「出会い」をご用意して、皆様をお待ちしています。
生フェスで様々なことに“挑戦”してみませんか？

◆日時：平成２９年１２月３日（日）午前９時４５分～午後３時４５分
◆場所：入間市産業文化センター周辺
◆主催：入間市・入間市教育委員会・（公財）入間市振興公社
　　入間市生涯学習をすすめる市民の会
◆主管：第２３回いるま生涯学習フェスティバル実行委員会

◉編集後記◉

○かがやくの編集に携わり日々を楽しみ、かがやいている皆様に出会いました。何かを始めるとき、年齢は関係ないのですね。（ＩＳ）

○各地で発生するゲリラ豪雨の被害。異常気象の日本列島の中で日々無事でいられることに感謝！（ＫＨ）

○見出しのタイトルに関連したアンケート調査を頂きました。現状を反映した記事になったと感謝しております。（ＳＫ）

○10月は誕生月です。この一年を振り返り、少しずつでも前に進んでいる自分を頼もしく感じます。そしてまた一歩。（ＴＥ）

○春・夏・秋・冬それぞれの季節ごとに咲く花は、忙しい現代人の心を和やかにしてくれます。（ＨＴ）

○『いわさきちひろ』の便箋を貰いました。幼な子の愛らしい表情が印刷されています。秋の夜長、手紙を書きたくなりました。（ＹＹ）

◎生涯学習情報紙「かがやく」広告募集!!

「かがやく」は年2回発行し、広報いるまとともに全戸配布する生涯学習情報紙です。
各種宣伝や募集など、広告を掲載してみませんか？

●お気軽にお問い合わせを！
担当：市教育委員会社会教育課
TEL 2964-1111（内4124）

企画編集：「かがやく」編集委員会
発行：入間市教育委員会社会教育課

お問い合わせ連絡先　入間市教育委員会社会教育課
〒358-8511 入間市豊岡1-16-1
TEL 04-2964-1111（内線4124）　FAX 04-2964-4841

編集委員（五十音順）　飯島静江　角屋裕子　島田耕作　瀧澤絵里子　橋本敏子　山下洋子

この発行物は資源ごみ「雑がみ」として出せます。